

〔研究報告〕

## 看護師と介護福祉士の職務継続要因

### —職業選択動機に関する検討—

儀本 章子<sup>1)</sup>、工藤 雄行<sup>2)</sup>、小池 妙子<sup>1)</sup>

#### 要 旨

A県T地区の医療機関、介護保険施設等に継続して勤務する看護師12名、介護福祉士14名に、職務継続の要因について聞き取り調査を行い、そのうちの職業選択動機について分析した結果を、職種別に比較した。

分析の結果抽出された7概念から、関連性のある内容を結び付け「家族の影響」「看護・介護の体験」「自立のための資格取得」「テレビ番組の影響」の4カテゴリーが生成された。

これらのうち「看護・介護の体験」「自立のための資格取得」は、看護師と介護福祉士間での相違はみられなかった。

「家族の影響」は、看護師では「家族や親族が医療・福祉関係者」「家族の病気や障害」の2概念、介護福祉士では「お年寄りが好き」を加えた3概念で構成された。また「テレビ番組の影響」は看護師のみで、介護福祉士にはみられなかった。

両職種の違いは、社会における周知度の差が一因であると考えられた。また両職種ともに、体験の機会等、情報提供の大切さが示唆された。

キーワード：看護師、介護福祉士、職業選択動機

#### I はじめに

医療機関や介護保険施設での看護・介護職員の不足が社会問題となって久しい。看護師の場合は数十年前から続いており一向に解消されず、日本看護協会、都道府県看護協会等で看護師の離職防止に向けての取り組みを進めている<sup>1)</sup>。日本看護協会の2008年度の調査によれば、全国の2803病院について常勤看護職員の離職率は11.9%、新卒看護職員の離職率は8.9%であった<sup>2)</sup>。介護福祉士の場合は資格制度制定から20年を経過し、有資格者が80万人以上に達しているにもかかわらず、実際に勤務についていない潜在介護福祉士が約20万人以上存在すると言われている<sup>3)</sup>。また介護労働安定センターの調査によれば、介護サービスを実施する7,515事業所での2008年9月から1年間の介護職員の離職率は17.0%であった<sup>4)</sup>。

一方で、日本看護協会看護師職能委員会の中堅看護師を対象とした調査で、対象者の98%が今までに仕事を

辞めようと思ったことがあるものの、56%が今の勤務状態に満足しているという結果<sup>5)</sup>や、介護福祉士については、厚生労働省の実態調査によれば、調査対象となった介護福祉士の約50%が「現在の職場、同じ職種で働きたい」との意向を持っている<sup>6)</sup>などの報告もある。看護師も介護福祉士も、離職したい気持ちを持った経験があるながらも、様々な要因が関連して職務継続しているものと考えられる。

そこで昨年、A県T地区において、病院や介護老人保健施設等に、継続して3年以上勤務する看護師、介護福祉士を対象として「職務継続の要因」に関するインタビュー調査を実施した。厳しい現状の中で職務を継続している要因を明らかにすることで、離職防止や人材確保に役立つと考えられたことによる。また看護師と介護福祉士は、業務内容に共通する部分もあり、同職場で協働する機会も多いが、介護福祉士資格は看護師と比較して新しく、資格取得方法などの違いもある。そのため看護師と介護福祉士に同じ内容でインタビューを行ない、両

1) 弘前医療福祉大学 保健学部 看護学科

2) 弘前医療福祉大学短期大学部 生活福祉学科

者を比較検討することを試みた。

インタビューの項目は「職業選択の動機」「一人前になった時期とその理由」「職務継続している理由」「職場環境と職務継続の関係」「影響を受けた人や出来事」「研修や勉強会の影響」「個人の価値観等の影響」などである。

このうち入職後現在までの職務継続のプロセスについての分析から、両職種とも職場内外の環境、専門性発揮やスキルアップの機会、患者・利用者との関係、本人の意思や価値観など、様々な要因が関連して職務継続につながっていること、看護師と介護福祉士では、職務継続要因の内容に違いがみられること、などの知見を得た。これらの分析結果については、既に報告した。<sup>7)~9)</sup>

本稿では「職業選択の動機」についてを分析テーマとした。この項目の設定は、職業選択動機が現在までの勤務継続に何らかの影響を与えている可能性があることを想定していたためであるが、結果は調査対象者のほとんどが、高等学校卒業時またはそれ以前に進路選択し、養成施設に進学していたため、「職業選択動機」の質問に対して「資格につながる養成施設への進路選択の動機」として回答されていた。看護師の場合は全員が、また介護福祉士も養成施設で資格取得する場合は、進学を決めた段階で職業につながる資格取得を目指し、卒業後は取得した資格を生かして就職することとなる。しかし、看護師を対象とした小野の研究によると、看護師というキャリア選択の時期は、多くの場合は高等学校卒業時の進路選択時であるが、それ以前の場合と、養成施設への入学後や看護師として働き始めてからの場合との、大きく3つに分けられるという<sup>10)</sup>。近年は養成施設において、入学した後に進路変更する者や、目的意識があいまいなまま入学し、学習意欲に欠ける者の増加が問題になっているが、養成施設への進学の動機は、必ずしも現在の職務継続に結びつくものではないと言える。

一方、二瓶らの女子短期大学卒業生を対象とした調査によると“看護職では「人に勧められて」「他方面への受験失敗」など、職業選択の動機が「非自主的」な者は、職業継続意志が低い”という結果<sup>11)</sup>が報告されている。また、南らの福祉系短期大学生を対象とした調査で“大学選択動機としての学歴志向や介護福祉に関する学習意欲が高い学生は、卒業後の職業選択過程においても自信を持って行動できることが示唆された”との報告<sup>12)</sup>もある。

つまり、養成施設などへの入学を選択した動機は、現時点での職務継続理由と直接的には結びついていないとしても、対象者が現在まで職務継続してきたことと、無関係とは言い切れず、現実には職務継続している職員の、進路選択動機を知ることが、中学生や高校生の進路選択の動機付けに有効な支援について、示唆を得られるとも

考えられる。

また、看護師や介護福祉士の職業選択動機に関する調査研究は、多くがアンケート調査であり面接によるものは見当たらず、看護師と介護福祉士とを、同時に調査し比較した研究も、みられないため、両職種に対する面接調査の結果を比較検討することにも意義があると思われる。

本報告では、病院や介護保健施設で勤務継続している看護師および介護福祉士の「職業選択動機」に関するインタビュー内容を分析し、看護師と介護福祉士の結果を比較検討して両者の共通点、相違点を明らかにすることとした。

## II 研究目的

A県T地区の病院および介護保険施設に継続して勤務している看護師、介護福祉士の職業選択の動機を知り、職種間の共通点、相違点を明らかにすると共に、養成施設入学の動機付けのため、中学・高校生に対する進路指導への示唆を得ることを目的とする

## III 研究方法

### 1 調査対象者の選定

調査対象者は、A県の地方都市を中心とする人口約33万人の都市圏（以下T地区とする）の病院および介護老人保健施設等に、常勤として3年以上勤務継続している看護師、介護福祉士とした。3年以上の勤務継続者を対象とした理由は、看護師のキャリア発達段階を、入職後の2・3年を探索期（進路選択の時期）から確立期の移行期、3～5年以降を確立期とした小野の文献<sup>13)</sup>による。

最初に、研究主旨を記載した依頼文書により施設長宛に協力依頼し、承諾の得られた施設で、条件に該当し同意の得られた職員に対し、面接調査を行った。調査対象となる職員の選定は、施設側に依頼した。

結果、11施設から承諾が得られ、看護師12名、介護福祉士14名が調査対象となった。

### 2 データ収集および分析の方法

#### (1) データ収集方法

対象者1名につき30分～1時間程度の半構成的面接を実施した。

面接の内容は、看護・介護職を選択した理由、仕事で一人前になったと思われる時期とその理由、職務を継続する上で影響を受けた人や出来事、指導する後輩や同僚の有無と指導の内容、人事異動の有無と専門性・やりがいの関係、勤務条件の職務継続への影響、生活環境や価値観等の個人的な理由の影響などとした。内容につい

てはインタビューガイドを事前に作成し、ガイドに沿って面接を進めた。

面接場所は対象者の勤務先施設で、相談室等プライバシーの保てる場所を借用した。

(2) データ収集期間

2009年10月～12月

(3) 分析方法

インタビュー内容は、対象者の了解を得てICレコーダーに録音し、逐語録に起こしたものを、木下の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA)<sup>14)</sup> の手法を用いて概念化し分析した。

面接内容の録音から作成した逐語録を生データとし、1事例ずつ全ての語りを通読した。そして、テーマに沿った意味のある場面を短文として取り上げて定義づけを行い、定義したものに概念名をつけた。逐語録の内容を概念化する過程での検討の結果、分析テーマとして「資格につながる進路選択動機」及び「入職から現在までの職務継続要因」の2つを設定し、テーマ別に分析することが妥当であると考えた。そのため、既報「職務継続要因」の分析を実施した後、今回のテーマ「職業選択動機」に関する分析を行うこととした。

事例を増やしていくごとに、既に定義づけられた概念

に当てはまる場面は具体例として追加し、異なる場面があれば新たな概念名をつけていったが、いずれの場合も、その都度概念名と定義づけの妥当性を検討した。概念生成を行う過程で研究者が考えたことは「理論的メモ」として概念ごとに記述していった。全ての対象者のデータを概念化した後、関連性のあるものを統合してカテゴリー化した。

これらの作業は、対象者別に3名の研究者が分担したが、概念名や定義づけ、カテゴリー化については、データの何をどのように見ているか、分析テーマに即しているかなどについて、共通認識が持てるよう話し合いを行い、進めていった。また、先行研究の理論、概念命名等から著しく逸脱した表現の有無についても検討を行った。

### 3 倫理的配慮

調査対象者に対して面接前に、研究の主旨と方法、参加は自由意思であり中断もできること、収集されたデータは研究目的以外に使用しないこと、論文等で公表する場合は個人名が特定されないこと、データの保存には細心の注意を払い、研究終了後には破棄すること等を記載した同意書を用いて説明し、同意書に署名を得た。同意書は2通作成し、1通を研究対象者、1通を研究者が所

表1 調査対象者一覧

職種	氏名	性別	年齢	所属	現職場の勤続年数
看護師	A	女性	30代	A病院	10年
	B	女性	20代	A病院	6年
	C	女性	30代	B病院	10年
	D	女性	30代	B病院	8年
	E	女性	20代	B病院	4年
	F	女性	20代	C病院	8年
	G	女性	20代	C病院	8年
	H	女性	40代	C病院	8年
	I	女性	20代	D病院	5年
	J	女性	20代	D病院	6年
	K	女性	20代	D病院	5年
	L	女性	50代	H老健	30年
介護福祉士	a	女性	30代	E老健	10年
	b	男性	20代	E老健	3年
	c	男性	40代	Jデイ・有料H	6年
	d	女性	30代	Jデイ・有料H	6年
	e	女性	30代	IGH	10年
	f	女性	20代	F老健	5年
	g	女性	30代	F老健	11年
	h	女性	30代	IGH	13年
	i	女性	30代	G老健	14年
	j	女性	40代	G老健	24年
	k	女性	20代	IGH	6年
	l	男性	30代	IGH	9年
	m	男性	20代	H老健	4年
	n	女性	20代	H老健	7年

※ 老健・・・介護老人保健施設、デイ・有料H・・・デイサービス・有料老人ホーム  
GH・・・認知症対応型共同生活介護(グループホーム)

持することとした。

## IV 結果

### 1 対象者の概要

表1に示すように、看護師は12名全員が女性、年齢は20代から50代まで、勤務先はほとんどが病院で、現職場での勤続年数は4年から30年までであった。

介護福祉士は、14名中女性が10名、男性が4名、年齢は20代から40代まで、勤務先は介護老人保健施設、グループホームなどで、勤続年数は3年から24年までであった。なお、介護福祉士資格を国家試験によって取得している場合、受験前に同一職場で介護職員として勤務していた期間は、勤続年数に通算されている。

### 2 対象者の職業選択動機

面接データを逐語録に起こしたもののから、職業選択動機に関する内容を抽出し、類似の内容のものをまとめて定義づけした上で、共通項目を抽出し概念化を図った。さらに、概念間に関連性のある内容を統合させ、カテゴリー化したところ、「家族や親族が医療・福祉関係者」「家族の病気や障害」「お年寄りが好き」「患者・利用者に接した体験」「看護・介護職に接した経験」「経済的自

立につながる進路選択」「テレビ番組の影響」の7概念から、「家族の影響」「看護・介護の体験」「自立のための資格取得」「テレビ番組の影響」の4カテゴリーが生成された。

このうち、カテゴリー「家族の影響」は、「家族や親族が医療・福祉関係者」「家族の病気や障害」「お年寄りが好き」の3概念で構成されたが、「お年寄りが好き」の概念は、介護福祉士のみで看護師にはみられなかった。また「テレビ番組の影響」は、概念が単独で同名のカテゴリーを形成したが、看護師のみで介護福祉士にはみられなかった。

なお「親の勧め」など「非自主的」な職業選択動機のみは回答は少なく、二瓶らの先行研究と通じる結果となった。

カテゴリー、概念と定義、具体例を表2に示す。

## V 考察

看護師や介護福祉士（学生も含む）を対象とした調査結果によれば、職業・進路選択の動機として「やりがいがある」「人の役に立つ仕事」などが多くみられる<sup>15)~16)</sup>と言われる。しかし、今回の調査結果では、このような職業選択動機を挙げた対象者はみられなかった。これは、

表2 「職業選択の動機」概念と定義、カテゴリー

カテゴリー	概念	定義	具体例
家族の影響	家族や親族が医療・福祉関係者	家族や親族に同じ職種または関連分野の人がいて影響を受ける	<看護> 母が看護師で小さい時から看護師になりたいと思っていた 親が昔福祉の仕事をしていた。親も医療系を勧めた <介護> 姉が介護福祉士で影響を受けた 親族が老人ホームを運営していて小さいころからそういうのがいいなと思っていた
	家族の病気や障害	病気になったり障害を持った家族に何かしてあげたい(してあげなかった)と思った経験	<看護> 中学校の時祖父が他界し、なにもできなかったことで後悔して医療の道を目指す <介護> 小学生の時に祖母が亡くなりショックだった。幼心に将来は高齢者のお世話をしたいと思っていた 祖父が倒れて家で介護することになった。介護する母を助けたいという思いもあり養成校へ進学した
	お年寄りが好き	祖父母が同居または身近にいたためお年寄りが好きで、介護職を目指す	<介護> 祖父母にかわいがられ、お年寄りが好きだから お年寄りか話すのが楽しい。祖父母が近くだったので
看護・介護の体験	患者・利用者に接した体験	高校生の1日看護体験やボランティア活動などで患者、利用者に接した体験の影響	<看護> 高校の時に1日看護体験で患者さんに喜ばれたのが嬉しくて <介護> 高校の授業で老人ホームを訪問、利用者の笑顔を見ると嬉しくなってこの職業を選択した 中学の時近くの老健に慰問に出向いたことがあった
	看護・介護職に接した経験	自分や家族の病気、ボランティア活動などで、看護師や介護職員の仕事をみたことが進路選択の動機になる	<看護> 子供の頃に入院した経験がある 家族がかかっていた病院の、看護師の働きぶりをみて <介護> 高校の時福祉施設でのボランティアに関わり、こういう仕事もあるのだと感じた 介護保険施設で働いていた時、介護職員の仕事をみていた
自立のための資格取得	経済的自立につながる進路選択	経済的自立につながる資格取得を目指しての進学	<看護> 今後のことを考え、手に職をつけるためには看護師になりたいと思った 母親が病気になり、自立しなければと思った <介護> 担任の先生の、これから食べていける方がいいというアドバイスで、福祉の仕事へ進もうと決めた。 資格を持っていれば、一度退職してもまた働くことができたと思った
テレビ番組の影響	テレビ番組の影響	テレビなどマスコミの影響を受ける	<看護> 子供の頃にドラマを見て、医療関係の仕事と思っていた 高校卒業の時にテレビで見て、医療関係とかがすごいな、みたいな興味で



先行研究が質問紙法によるものであるのに対し、本研究では「職務継続の要因」調査の一部として、対象者に自由に語っていただく方法を取っているため、抽象的な志望動機ではなく、具体的な体験が、職業選択動機として挙げられやすかったためではないかと考えられる。

以下に、カテゴリー別の分析結果について述べる。

## 1 家族の影響

養成施設に在学中の学生を対象とした先行研究によれば、看護師も介護福祉士も進路選択に親や家族の影響が大きい<sup>17)~18)</sup>ことが示されている。今回の調査では、対象者に家族の影響の有無を直接訪ねることはしていないが、対象者の約半数が、職業選択動機に家族の影響があると回答していた。

### (1) 家族が医療・福祉関係者

家族等の身近に同じ職業の者がいる場合、モデルとして自分も同じ職業を志す者が多い一方で、勤務の大変さなどマイナスの情報を得やすくなるとも言われる<sup>19)</sup>。しかし、マイナス面も含めて職種に対してある程度の知識や理解を得た上で進路選択できることと、身近に同じ職種や業界の先輩がいて、わからないことを相談したり精神的な支えとなったりするなど、職務継続しやすい環境条件に結びつくことが考えられる。

今回の調査対象となった看護師12名のうち半数近くが家族や親族に看護師がいることが進路選択に影響したと答えている。他に「親が福祉系」という答えもあり、対象者の半数が家族に看護師や関係職種の人がいるという結果になった。これは、「看護学科の学生は身内に看護師がいる割合が5割に近い」という石本の調査研究結果<sup>20)</sup>とほぼ等しい。

介護福祉士の場合、養成校の学生を対象とした調査で、介護福祉に興味を持ったきっかけに「家族や身内が介護福祉に携わっていた」を挙げた者が35%、という報告<sup>21)</sup>があるが、今回の調査対象者では「姉が介護福祉士」「母が保育士」「親族が介護保険施設を経営」など、身内に福祉関連職種がいるという答えがあった。介護福祉士の場合は資格制定からの期間が短いため、家族に介護福祉士がいる者は、看護師と比較して多くはない筈である。しかし、福祉関係職で働く人が身近にいることが、介護福祉士という職業選択につながっている。

### (2) 家族の病気や障害

先行研究では看護師の場合、病気の家族に何もできなかった経験から“使命感のような価値観に駆られたケースが少なくない”という小野<sup>22)</sup>の報告などが、介護福祉士の場合は、養成校の在学生在が介護福祉への興味・関心に影響を及ぼした要因は「高齢者や障害のある家族との同居や介護に接して」が30.5%という立島らの調査報

告<sup>23)</sup>などがあるが、今回の調査対象者の場合も、両職種とも家族、特に祖父母の病気や障害を、進路選択動機として回答していた。

### (3) お年寄りが好き

祖父母と同居や近い関係で、お年寄りが好きなことが職業選択動機となる場合である。調査対象者のうち、何名かの介護福祉士がこのことを挙げていたが、前項「家族の病気や障害」を動機として挙げられた回答に、「かわいくなってくれた祖父や祖母の死」があることも加えると、介護福祉士の職業選択動機には、祖父母と親しい関係であったことの影響が、大きいことが示された。

「高齢者が好き」は先行研究においても、介護福祉士の進路選択理由として高い割合で挙げられている<sup>24)</sup>。また、藤若らの調査研究に、祖父母と親和性の高い孫は「家族が介護を担う」という家族介護意識が高いと同時に、「介護は社会支援によって支えられるべきである」という「社会的介護意識」も高いという結果がみられる<sup>25)</sup>という報告があるが、先行研究や今回の調査結果にみられる様に、祖父母と親しい関係の孫が、社会的介護の担い手である介護福祉士を目指すことと通じる点があり、興味深い。

一方、看護師で「お年寄りが好き」を挙げた者はなかった。先行研究においても看護師の進路選択動機に「人の世話をするのが好き」「人の役に立ちたい」などが挙がる場合はあるが<sup>26)</sup>、「お年寄りが好き」はみられなかった。

看護の対象者は、乳幼児から高齢者まで幅広く、また一般的に看護は、健康障害をもつ人に対する仕事であると理解されている。それに対して介護は、実際には幅広い年齢層が対象となる業務であるが、介護の利用者は高齢者が圧倒的に多く、「介護」と「高齢者」の組み合わせは、社会的に認識されている。そのため、子どもが好きな者が保育士や幼稚園教諭を目指す<sup>27)</sup>のと同じ様に、お年寄りが好きな者が介護福祉士を目指しているのではないかと思われる。

## 2 看護・介護の体験

対象者である患者や利用者に接したり、現場で実際に看護師や介護福祉士の業務を見たりした体験は、目指す職種をより具体的にイメージすることができ、明確な動機づけにつながる。そのため、厚生労働省による福祉・介護人材確保対策の一環としての職場体験事業<sup>28)</sup>や、日本看護協会・各都道府県看護協会による「ふれあい看護体験」<sup>29)</sup>などが推進されている。

「看護・介護の体験」カテゴリーは、「患者・利用者に接した体験」「看護・介護職に接した体験」の2概念から生成され、看護師と介護福祉士で違いはみられなかった。

### (1) 患者・利用者に接した体験

看護・介護体験などで患者や利用者に接して、「利用者の笑顔」「喜んでもらったのが嬉しかった」等の体験が、職業選択の動機として挙げられたケースである。体験の場は、看護師が「高校の看護体験」のみであったのに対し、介護福祉士は「高校の授業」「ボランティア」「施設への慰問」など多彩であった。

介護の利用者である高齢者と接する機会は、進路選択のための介護体験以外にも数多くあるのに対し、「患者」と触れ合う機会は、医療機関での看護体験以外では難しい。従って「看護体験」は、看護師を目指す学生が患者と接する貴重な機会であり、進路選択の動機づけとして、大きな役割を果たしている。

### (2) 看護・介護職に接した経験

石本が女子短期大学において看護学科と幼児教育学科の入学生を比較した研究によれば、看護学科学学生の医療体験率（入院、ギプス、手術等）が、幼児教育学科と比べて高いことが報告され、進路選択動機に影響を与えていると考えられている<sup>30)</sup>が、今回の調査でも、自分や家族の入院、通院で看護師に接した経験が、看護師の職業選択動機として挙げられた。

一方「看護体験」は「患者と接した体験」として語られ、「看護師と接した経験」としては挙げられていない。看護体験は、患者と直接接する機会であると同時に、その医療機関で働く看護師と接する機会でもある。しかし、体験する学生にとっては、「患者に喜んでもらった」体験の方が印象に残りやすいのではないと思われる。

介護福祉士の場合、「施設のボランティアでこういう仕事もあるのかと思った」という内容の発言があり、看護師と比較すると、資格の存在や業務内容が周知されていないことの反映と言える。従って、介護体験やボランティアでの施設訪問などが、資格や業務についての情報を得る機会となる。

## 3 自立につながる進路選択

学生対象の先行研究で「入学の動機」に「資格取得」を挙げる者は少なくない<sup>31)</sup>が、今回の調査でも看護師、介護福祉士共に「資格取得」が職業選択の動機であったという答えがみられた。具体的な内容は「母が病気になって自立しなければと思った」という切実なものや、「資格があれば一度退職しても再就職できると思った」という、将来展望を考慮したものから、「とりあえず資格を取っておこうと思った」というものまで様々であり、各対象者の置かれた環境や世代の差が反映されている。

しかし、看護師は業務独占の資格であり、進路選択はそのまま、資格取得を目指すことでもある。介護福祉士の場合も、養成施設に入学するのであれば同様のことが

言える。「職業」と「資格」が同じ意味を持つのであれば、既に資格取得して勤務している立場の対象者の場合、職業選択理由として「資格取得」が語られることがなかったとしても、実際の職業選択場面においては、「資格」が意識されていたのではないかと考えられる。

## 4 テレビ番組の影響

ドラマなどテレビ番組の影響により看護師を選択したケースで、看護師にこの回答があり、介護福祉士にはみられなかった。テレビ番組の具体的な内容は質問していないが、テレビドラマを始め映画、小説、漫画などで看護師が登場するものは数多く、医療現場を扱ったドキュメンタリー番組も少なくないので、テレビ番組が看護師を志すきっかけとなることに違和感はない。しかし、テレビを動機として挙げた看護師も、テレビ番組の影響のみで進路選択した訳ではなく、「ドラマの影響と親からの勧め」「職業を選ぶのに、テレビでみて医療関係と思った」など、テレビ番組から得られる情報を、進路選択の参考にしてしている状況がうかがえた。

介護福祉士の場合は、看護師と比較して新しい資格であり、知名度も低い。仮に老人ホームのような介護現場が舞台のドラマがあったとしても、登場する介護職員と、介護福祉士の資格とは結びつけ難いと思われる。介護福祉士が主役、または介護福祉士の業務に焦点を当てた番組であれば、職業選択のきっかけにつながる可能性もあるが、現在のところそのような番組は、あまり多くない。

なお、近年はテレビ番組で介護職場の厳しい現状が報道された結果、介護福祉士を目指す若者が減少しているなど、マスコミのもたらす負の影響も問題となっている。

## 5 両職種の特徴と、進路指導の課題

前項まで、カテゴリー別に看護師と介護福祉士の職業選択動機について考察してきたが、全体を総括すると、次のようなことが言える。

看護師の場合は、家族や親族が看護職であったり、自分や家族の病気で看護師と接した経験があるなど、身内も含めてモデルになる看護職の存在が、職業選択に影響するのに対し、介護福祉士の場合は、介護の利用者、特に祖父母も含めた高齢者と接して嬉しかった経験や、その人たちに何かしてあげたいと思ったことが動機になりやすい。

両者の違いは、資格制度の歴史の長さや周知度などに関連していると考えられる。看護師の場合は、既に職種が存在が広く知られており、女の子が将来なりたい職業では、上位に挙げられるのに対し、介護福祉士は資格制度制定から20年であり、近年の高齢社会への対応、介護保険制度との関係などにより、一般にも知られるよう

になってはいるが、看護師には及ばない。お年寄りが好きで、高齢者と関わる仕事をしたいと思った時に、初めて介護福祉士という資格があることを知る場合も少なくないと思われる。

なお、対象者に「非自主的」な動機の職業選択が少なく、また聞き取りの具体的な内容から、いずれの職種の場合も、単なるあこがれやイメージだけでなく、資格や業務内容について、具体的な情報に基づいて職業選択していたことがうかがえた。

上記の結果を踏まえ、進路指導の課題として以下のようことが挙げられる。

「家族の影響」と「介護・看護の体験」は、いずれも職業選択の大きなきっかけとなっているが、家族に関しての関与は困難であるため、進路指導では「情報」や「体験」を提供することが重要な役割となる。

看護・介護に興味のある中・高校生のみでなく、保護者や担任・進路指導教員などが、看護師や介護福祉士の資格や業務内容等について理解できるよう、詳しい情報提供や、患者・利用者に接し、職員の仕事を直接見聞きできる、看護・介護体験の機会が、多く設けられることなどが望まれる。

情報入手の手段として「テレビ番組の影響」も無視できない。近年はインターネットの普及により、さらに多くの情報を入手できるようになっているが、情報の氾濫によって起こる混乱を防ぐため、必要な情報を意図的に選択し、提供していくことが必要である。

## VI 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、A県T地区の施設勤務者のみが対象であること、対象者の人数が少ないこと、年齢や勤務経験年数の幅が大きいこと、性別が女性に偏り、特に看護師では男性の対象者がなかったことなどが挙げられる。

今後は、年齢や勤務年数による違いの有無、さらに男性の看護師や、首都圏など異なった環境で勤務する看護師・介護福祉士の状況なども明らかにしていきたい。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました看護師、介護福祉士の皆様、並びに施設責任者及び関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

(受理日 2011年2月9日)

## 文 献

- 1) 日本看護協会：2010年度（平成22年）通常総会 総会要綱：P33～34. 2010
- 2) 日本看護協会制作企画部編：日本看護協会調査研究報告〈No.82〉2010 2009年 病院における看護職員需給状況調査. P21：社団法人日本看護協会. 2010
- 3) 厚生労働省：福祉・介護人材確保に関する説明会資料「福祉・介護人材確保対策について」：P41. 2009
- 4) (財) 介護労働安定センター：事業所における介護労働実態調査結果. 平成21年度介護労働実態調査結果について：P2. 2010
- 5) 神谷正湖, 川本利恵子, 工藤 幸, 中島すま子, 福田裕美：中堅看護師の離職防止に向けた支援体制に関する検討小委員会報告. 日本看護協会. 平成22年度職能集会検討資料：P138～156
- 6) 厚生労働省社会・援護局福祉基盤課：介護福祉士等現況把握調査の結果について. 2009
- 7) 小池妙子, 礒本幸子：A地区における看護師の職務継続要因と継続教育への示唆. 日本看護学教育学会誌. 120：P228. 2010
- 8) 礒本幸子, 小池妙子, 工藤雄行：A地区における看護師と介護福祉士の職務継続要因. 日本看護研究学会雑誌. 33(3)：P160. 2010
- 9) 工藤雄行, 小池妙子, 礒本幸子：介護保険施設における介護福祉士の職務継続要因. 第8回日本介護学会予稿集：P36～44. 2010
- 10) 小野公一：キャリア発達におけるメンターの役割. P143～150：白桃書房. 2003
- 11) 二瓶恵子, 筒井 静, 田口玲子, 尾崎フサ子：女性医療職種間における職業継続意志の要因とその強さの相違. 日本看護学会誌. 6(1)：P26～35. 1997
- 12) 南 正信, 矢花 光, 岩田裕美, 船越利代子, 長島 緑：福祉系短期大学生の進路選択過程における自己効力感と大学選択動機との関連. つくば国際短期大学紀要(35)：P92～96. 2007
- 13) 小野：前掲10). P140
- 14) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 弘文堂. 2003
- 15) 荒川靖子, 小野ツルコ, 小原ルリ子, 伊東久恵, 喜多嶋康一：短大看護学科への進路決定に影響する要因の研究. 岡大医短紀要(2)：P97～104. 1991
- 16) 一柳陽子, 谷山 牧, 川崎千寿子, 武内和子, 小濱優子：看護学生の入学・職業選択動機の実態と構造. 川崎市立看護短期大学紀要. 14(1)：P21～27. 2009
- 17) 北原佳代, 佐々木美樹, 岡部恵子：職業選択に対す



- る学生の考え方と親への相談状況の関係. つくば国際短期大学紀要 (33) : P122 ~ 139
- 18) 立脇一美:『介護福祉』への興味から養成校受験に至るまでの意識形成過程. 聖泉論叢 (16) : P177 ~ 196. 2008
- 19) 同上
- 20) 石本傳江:女子短期大学生の医療に関する入学前の体験調査. 新見女子短期大学紀要. 18 : P127 ~ 132. 1997
- 21) 立脇:前掲18)
- 22) 小野:前掲10). P145
- 23) 立島 真, 西井啓子, 吉田紀子, 関 好博, 宮田伸朗, 山口悦子:介護福祉士養成校の志願者動向とこれからの課題について. 富山短期大学紀要. 43(1)
- 24) 立脇:前掲18)
- 25) 藤若恵美, 進藤貴子, 永田 博:孫世代の高齢者介護感と介助に対する自信-祖父母との線密性と看護経験との関連-. 川崎医療福祉学会誌. 19(2) : P351 ~ 357. 2010
- 26) 小野:前掲10), 荒川他:前掲15) など
- 27) 松永しのぶ, 富田庸子, 田中奈緒子, 坪井寿子, 伊藤嘉奈子, 入江礼子:教育・福祉関係に就職する女子大学生の職業選択 III 職業選択過程についての面接調査. 日本教育心理学会論文集 (41) : P436. 1999
- 28) 厚生労働省:前掲3). P43
- 29) 日本看護協会:平成21年度事業報告, 平成22年度事業計画. 2010年度(平成22年)通常総会 総会要綱 : P61 ~ 114, P118 ~ 140. 2010
- 30) 石本:前掲20)
- 31) 一柳他:前掲16), 立脇:前掲18) など

## Factors regarding job continuity of nurses and certified care workers: an examination concerning career choice motivation

Akiko Isomoto<sup>1)</sup> Yuukou Kudou<sup>2)</sup> Taeko Koike<sup>1)</sup>

1) Department of Nursing, Faculty of Health Science Hirosaki University of Health and Welfare 3-18-1 Sanpinai Hirosaki, Aomori 036-8102 Japan

2) Department of living and welfare, Hirosaki University of Health and Welfare Junior College 3-18-1 Sanpinai Hirosaki, Aomori 036-8102 Japan

### Abstract

The authors conducted an oral survey on the factors that impact the continuity of employment of persons at medical institutions and nursing care insurance facilities in the T-District of A-Prefecture. Twelve nurses and fourteen certified care workers were asked about the main reasons for their continuing in their professions, and the results of an analysis of their career choice motivations were then compared according to occupational category.

Amongst the seven concepts extracted from this analysis, four categories bearing particular relevance, "family influence", "nursing and care service experience", "qualification acquisition to gain independence", and "influence of television", were developed.

"Nursing and care service experience" and "qualification acquisition to gain independence" were of equal relevance to both nurses and certified care workers.

For the nurses, "family influence" could be divided into two sub-categories, "family members involved in medical or social welfare work" and "illness or disability within the family". For certified care workers, a third sub-category, "I like elderly people", was added. "Influence of television" was found to be relevant only for nurses.

From these results, it was surmised that one of the differences in these two career paths was the respective degree of public awareness. In addition, the results also suggested the importance of opportunities for added experience and the provision of relevant information.

Key words: nurse, certified care worker, career motivation